シリーズ奉仕職を考える　II

聖書朗読の喜び

礼拝における朗読奉仕への招き

司祭　ヨハネ　加藤　博道

― 発行によせて ―

「奉仕職シリーズ」の第二巻「聖書朗読の喜び」が発行されることになり大変嬉しく思っています。本書で述べられているとおり、神のみ言葉は神の恵みの出来事の動機なのです。

礼拝の中で聖書を朗読することは、聖餐式で司祭がパンとぶどう酒を聖別してキリストの人類救済の出来事を記念するように、歴史の中での神の恵みの出来事を記念し黙想することなのです。

イエスご自身も故郷のナザレの会堂で聖書を朗読されました（ルカ四章一六～一九）。一般の人々の読み書きがまだ普及していなかった時代の教会では、会衆に聖書を朗読して聞かせることは重要な役割でした。中世の教会で「朗読者」（Lector＝レクトル）といえば主教・司祭・執事の三聖職位の下位にある聖職位として尊敬

されていました。現代の教会では礼拝での聖書朗読はすべての信徒が積極的に奉仕するように期待されています。ただし、個人の信心行為と違って聖書朗読は会衆に聞かせることが前提であり一定の準備が必要です。

本書はその有益な手引きとなるものと信じます。

祈祷書の「聖書を読む前の祈り」（一三四頁）は、中世を通してあまりにも形骸化し迷信的になってしまった聖餐式に聖書朗読の意味をあらためて強調した英国の宗教改革の指導者クランマー大主教が作ったものです。以前は降臨節第二主日（聖書の主日）の特祷として親しまれてきたものですが、聖書朗読者はとくにこの祈りを捧げることをお勧めいたします。

日本聖公会東京教区

主教　ヨハネ　竹田　眞

聖書を読む前の祈り

わたしたちを教えるために聖書を記された主よ、どうかこれを聞き、これを読み、心を込めて学び、深く味わって魂の養いとさせてください。また、み言葉によって強められ、耐え忍ぶことを習い、み子によって授けてくださった限りない命の望みを抱き、常にこれを保つことができますように、み子イエス・キリストによってお願いいたします。　アーメン

礼拝における聖書朗読の奉仕は、現在は世界中の聖公会でも、ローマ・カトリック等の諸教会でも、広く信徒の奉仕者によって担われています。誰でも参加しやすい奉仕です。同時に礼拝の中での聖書朗読は、神の言葉を会衆全体、世界全体に向って伝え宣言する、大切な宣教のわざです。そこには務めの重さと、奉仕の喜びがあります。

礼拝における聖書朗読の大切さ

一　聖書を読み、「パンをさく」ことから教会は始まった

「わたしが行くときまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい」

（『テモテへの手紙一』第四章一三節）

「このようなわけで、わたしたちは絶えず神に感謝しています。なぜなら、わたしたちから神の言葉を聞いた時、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受けいれたからです。事実、それは神の言葉であり、また信じているあなたがたの中に現に働いているものです。」

（『テサロニケの信徒への手紙一』第二章一三節）

「この手紙をすべての兄弟たちに読んで聞かせるように、わたしは主によって強く命じます」

（『テサロニケの信徒への手紙一』第五章二七節）

「この手紙があなたがたのところで読まれたら、ラオディキアの教会でも読まれるように、取り計らってください。またラオディキアから回ってくる手紙を、あなたがたも読んでください」

（『コロサイの信徒への手紙』第四章一六節）

はじめに四つの新約聖書の箇所を挙げました。これだけ見ても、初代教会の人々の生活の中で使徒の手紙、および聖書が読まれていく様子を見ることができます。この時代に「聖書」という場合には、イエスご自身も読んでおられた聖書ー旧約聖書ーを第一に指します。同時に人々は自分たちの信仰の指導者、使徒たちの手紙を公の場で読みました。パウロはそれを「強く命じて」います。さらにそれは「人の言葉としてではなく、神の言葉として」受け入れられるようになっていきました。それは一部の学者が決定するものではなく、教会の集まりの中で朗読されてふさわしく、共同体の信仰が強められていく、そうした書簡なり書物が、「神の言葉として」受け入れられていったのです。ふさわしくないと見なされたもの、真正ではないと見なされたものは読まれなくなっていったでしょう。そうした人々の信仰を養う使徒の文書は、一つの地方の共同体だけでなく、他の地域でも読まれるようになっていきます。『コロサイの信徒への手紙』はその辺りのことを伝えてくれます。

もともとキリスト教礼拝の背景にあるイスラエルの人々の宗教生活において、聖書朗読は大変重要なものでした。とくに新約聖書にもよくあらわれる「会堂」（シナゴーグ）では、「律法の書」（『創世記』以下のいわゆるモーセ五書）と「預言の書」、その他の書が継続して朗読され、現在の私たちの祈祷書の聖書日課のような、三年周期の朗読配分も行われていました。

初代のキリスト者たちは、当初はユダヤ教の会堂礼拝にも参加していたと言われます。しかしやがてそこを出て（追放されて）自分たちの仲間の家に集まり、次第にキリスト者の礼拝が形を現していきます。その核となったものは、集まって「聖書」（旧約聖書）と使徒たちの手紙や記録（後に福音書と言われるものを含めて）を読むことと、キリスト・イエスご自身がなされたように、食卓を囲んで「パンをさく」ことでした。聖書の中では聖餐式の原型は「パンさき」と呼ばれています。もちろん詩編を歌うことや、共に祈り合うことが行われました。はじめに教会という組織や制度があり、それから「聖書でも読もうか」というのではなく、聖書を読み、祈り、パンをさくために人々は集まったのだと、そこから教会そのものが出発していったのだと言うことが出来ます。

二　歴史の中で　―その後の発展と聖公会―

二世紀の中頃、後に殉教したユスティノスが『第一護教論』という書物を書いて、キリスト教の礼拝の様子についての記録を残しています。

「太陽の日と言われる日に、町や村に住むわたしたちの仲間は、皆一つの所に集まり、時間が許す限り、使徒の記録、あるいは預言者の書物を読む。」

「朗読者が読み終わると、司会者が、これらの美しい教えを学ぶように勧め、励ます話をする」

「それから、皆一緒に立って祈る。祈りが終わると、先に述べたようにパンとぶどう酒と水が運ばれる。司会者は祈りと感謝とを、自分に与えられた力によってささげ、皆はアーメンと答える」

ここには「使徒の記録」と「預言者の書物」、つまり今日の旧・新約聖書の朗読と、それに続く説教、祈り（わたしたちの祈祷書では「代祷」に相当）、パンとぶどう酒と水の準備と奉献、そして感謝聖別の祈りへと繋がる聖餐式の形が見事に表わされています。

その後、教会の礼拝はどんどん形式を整えていきます。今日の『新約聖書』二七書も早い時期から形を整えていきますが、いくつかの書をめぐる議論は残り、西方教会において教会

の正典（規範）として確立するのは、四世紀末から五世紀初頭と言われます。礼拝における聖書朗読の実践も多様でした。四世紀のアンティオキアを中心とするシリヤの教会では、会堂での律法の書と預言書の朗読が残され、それに続いて使徒書と福音書の朗読が行われたり、アルメニア、古代ビザンティン、古代ガリア（フランス地方）、モザラブ（スペイン地方）、古代ミラノ、そしてエジプトの礼拝では一般に旧約聖書が読み続けられました。一方コプト教会やエチオピア教会では、新約聖書のみの四朗読（パウロの手紙、牧会書簡、使徒言行録、福音書）もあったそうです。七世紀以降はビザンティンでもローマでも、聖餐式の聖書朗読は使徒書と福音書だけになっていきます。聖公会の祈祷書が一六世紀に時のカンタベリー大主教トーマス・クランマーを中心に作られた時、この点に関してはローマの伝統が踏襲されました。二〇世紀の世界的な、教派を越えた礼拝と祈祷書改訂の動きに至るまで、ローマ・カトリックや聖公会の聖餐式の中では使徒書、福音書の二朗読となってきたわけです。

しかも聖書を含め礼拝全体は、西方教会では中世を通して原則的にはラテン語で行われていました。ラテン語が聖なる言葉、教会の言葉と考えられたのです。聖書を自分たちの言葉に翻訳する動きももちろんありましたが、それは命がけのことでした。一六世紀の宗教改革

でなされた大事業の一つは、聖書の自国語化でした。ルターによる聖書のドイツ語訳が、後のドイツ語の基礎をつくったと言われる程に歴史的意味を持つわけです。英国においても、クランマーが、聖書のみならず、自国語による、つまり国民みんなにわかる言葉による礼拝と、そのための英語の祈祷書の作成を通して改革を成し遂げ、聖公会が成立していきます。クランマーの手になる聖公会の歴史的な最初の祈祷書、『第一祈祷書』（一五四九年）に、このような「序文」があります。

「聖パウロは教会内では人々が理解し、聞くことによって益となる言葉で語るべきであると述べているが、このイングランド教会における礼拝は、過去何百年の間、人々の理解しえないラテン語で行われ、耳では聞くものの、心が教化されることはなかった」

ラテン語であるだけでなく、その時代の朗読配分や礼拝儀式そのものが、余りに多くなった聖人の祝日やそのための特別の祈りや音楽によって繁雑を極め、何がキリスト教礼拝の中心なのか分からなくなってしまっていたのを、クランマーは教会の礼拝の古典的な伝統を受けつぎつつ、簡潔に改めようとします。自国語による、会衆が理解出来て参加しやすい礼拝

を通して、会衆の信仰が養われること。それが聖公会の大事な出発点だったと言えます。当然、分かる言葉での分かりやすい聖書朗読は、その中で重要なものです。英国教会の祈祷書の英語、またその美しい朗読が、今日の英語の基礎となったとさえ、言われるのを聞いたことがあります。

二〇世紀、一九六〇年代になってから、ローマ・カトリック教会をはじめ世界の教会の中で、大きな教会刷新、自己変革の動きがあり、礼拝も刷新の中心の事柄となります。ローマ・カトリック教会でも礼拝全体をそれぞれの自国語で行うようになります。それと共に聖書自体や、礼拝における聖書朗読についても大変多くの研究がなされ、旧約聖書朗読の回復も含めた、現在私たちも用いている聖書日課配分の理論や、聖書朗読に関する理解が深められてきました。

初代教会の人々がそうであっただろうように、「新しい神の民」として共に集い、聖書の朗読を聞き、祈り、パンを分かち合う、そうした教会の原点への注目は、今日教派を越えて大切にされようとしています。

三 『朝・夕の礼拝』の場合

これまで聖餐式を中心に述べてきましたが、「朝の礼拝」「夕の礼拝」（早・晩祷）においても聖書朗読は大切です。大切というよりも聖公会の「朝・夕の礼拝」は聖書朗読を中心としていると言えます。

聖公会の「朝・夕の礼拝」の背景には、修道院を中心に発展してきた「聖務日課」といわれるものがあります。一日に七つから八つの礼拝が行われたのです。聖書朗読はもちろん含まれていますが、むしろ詩編や賛歌が多様に歌われることにより、芸術的に豊かではありますが、やはり繁雑になっていました。聖餐式の場合と同様、大主教クランマーは、伝統も重んじつつ、旧・新約聖書の継続朗読を中心に、礼拝の形を改革します。

私のごく限られた経験の中ですが、カンタベリー大聖堂の「夕の礼拝」（唱詠晩祷・コーラル・イーブンソング）に参加したことがあります。聖歌隊によって詩編や賛歌が歌われて大変美しい礼拝でしたが、一番印象に残ったのは聖書日課の朗読でした。ふつう私たちは、司式者が重要で聖職の務め、聖書朗読は誰かがちょっと手伝いで読む位に思いがちです。司式

が主で朗読が従です。ところがその礼拝は、礼拝全体は聖歌隊によって進められていきます。司式というようなものは聖歌隊の中の先唱者が担っており、どの人か分からなかったくらいです。一方聖書朗読は、先導者がついた聖職者がおごそかに後方の席から中央に進み出てきて、素晴らしい声で、耳にも本当に美しい英語で朗読しました。聖公会の「朝・夕の礼拝」では詩編や賛美の歌、祈りの中にあって、聖書朗読が中心的位置を占めているのだなということを、視覚的にも教えられた気がしました。

だから聖書朗読も聖職者がやる方がいいと言いたいのではありません。じっくりと聖書が読まれ、聞かれることを中心に「朝・夕の礼拝」を見直してみると、なにか新鮮な感じがしてきます。

聖書朗読の構造

―聖餐式の場合―

一 「旧約聖書」「使徒書」「福音書」の関係

このパンフレットは聖書朗読の実践に関心を持っています。あまり理論はいらないのですが、それでも毎主日、実際に読んでいる聖書朗読が、どのような意図で選ばれているのか、多少理解しておくことは奉仕の準備をさらに深めるかもしれません。現行祈祷書の聖書日課配分についてごく簡単に触れておきたいと思います。現在の祈祷書の聖餐式には「旧約聖書」、「使徒書」、「福音書」の三つの朗読があります。

話をわかりやすくするために、祝日の一つ「洗礼者聖ヨハネ誕生日」（六月二四日）の聖餐式日課を例にとってみましょう。『日本聖公会祈祷書』（一九九〇）の二四七頁にこの日の特祷と聖書日課が載っています。

旧約聖書　　イザヤ書第四〇章一節から一一節

使徒書　　使徒言行録第一三章一六節から二六節
福音書　　ルカによる福音書第一章五七節から八〇節

言うまでもなく、福音書はその日の主題、洗礼者ヨハネの誕生の場面です。その日の福音の出来事の中心です（「原型」）。それに対して旧約聖書ではイザヤ書第四〇章が読まれます。「呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え…」という預言者イザヤの言葉です。神様の人類に対する救いのご計画（救済史）の中で、あらかじめ示された言葉（「予型」）で、多くの場合「預言」と言っていいと思います。その預言の成就、神様の救いの計画の実現として、主イエスの福音の出来事があるという理解がここにはあります。さて「使徒書」では、パウロがアンティオキアの人々に向かってヨハネの洗礼に触れながら、悔い改めと主イエスへの信仰を説いています。福音に対して、弟子たちがどのように宣教し生きたかが語られているのです（「対型」）。

教会暦の中の、主だった期節、祝日には、この「旧約聖書」「使徒書」「福音書」の関係がかなりはっきり示されています。ローマ・カトリック教会の用語では「秘義選択朗読」と言

われます。その日の主題で一貫しているのです。

一方、その他の期節には、その日の特別な福音書が読まれるというよりは、A年「マタイ」、B年「マルコ」、C年「ルカ」の各福音書が原則として継続的に読まれていきます（継続あるいは準継続朗読）。そして各主日ごとに、その福音書に対応すると考えられる「旧約聖書」が選ばれています。しかし「使徒書」は、福音書に対応してというよりは、こちらもある書を継続あるいは準継続して読んでいきます。ですから必ずしも完全に同一主題が語られているとは言えないのですが、しかし聖書の主題が、根本的に神の国についての教えであると理解すれば、全然無関係の箇所などないと言えるでしょう。

二「A年」「B年」「C年」、その他

A年、B年、C年という三年周期の朗読配分については、A年が『マタイ福音書』、B年が『マルコ福音書』、C年が『ルカ福音書』を中心に選ばれているということに、ここではとどめたいと思います。また『ヨハネ福音書』は例えば洗礼に関係する記事や「命のパン」などキリストの「秘義」に関わる記事が多く記されていることから、それぞれふさわしい時に、

三年間を通して配分されています。例えばB年に『マルコ福音書』を続けて読んでいて、いわゆる「五千人以上の人々への給食」（特定一一・一二）を読んだところで、次の週にヨハネ福音書の「命のパン」に関する主イエスの言葉が挿入されている（特定一三）という具合です。それによって同一の主題について、違う角度から聖書の言葉を聞き、また説教することが可能になります。

その他、「復活節」には旧約聖書に替えて『使徒言行録』を読む習慣が古代からあり、採用されている等、この聖書朗読配分の問題はかなり複雑で、教会暦の理解とも関わっていますので、朗読に関するこの小冊子の域を越えます。現在の三年周期の朗読配分はローマ・カトリック教会やアメリカ聖公会他、またルーテル教会など、広く世界諸教会に共通に採用された日課表に基づいています。以前の一九五九年祈祷書と比較して、旧約聖書朗読が増えたことをはじめ、礼拝の中で読まれる聖書の量が格段に増えていることは確かです。しかし現在の朗読配分が最終的で完全かと言えば、そんなことはないでしょう。いずれにしても、朗読者もただ無関心に決められた所だけを読むのでなく、その日の他の聖書日課、とくに福音書が何なのか、心を向けてみることは意味もあり、また楽しいことと思います。

聖書朗読の実際

この章では、礼拝、とくに聖餐式における聖書朗読の実際について述べてみます。先にローマ・カトリック教会で礼拝に関するさまざまの改革があったと述べましたが、それに基づいて種々の文書が出されています。その中の『ミサの聖書朗読指針』（典礼省）の一節では、このように言われています。

「聞きとれる声で、はっきりと、味わえるように読む朗読者の読み方が、何より、朗読によって神のことばを集会に正しく伝えることになる」。

「聞きとれる声で、はっきりと、味わえるように」。まことに簡明な表現で、これ以上のことを言う必要はないと思えるほどです。どんなに理屈をこねても、また精神修行をして朗読に臨んだとしても、聞きとれず、はっきりとせず、味わいにくかったら仕方ありません。どうすることが味わいやすいのでしょうか。ロボットの言葉のように無表情に機械的に読むの

が味わいやすいか、逆に抑揚たっぷりに自分の感情を注ぎこんで読むのが、聞き手にとって（語り手にとってではなく！）味わいやすいのか。おそらくどちらでもないでしょう。結論としては「聞きとれる声で、はっきりと、味わえるように」という言葉で十分なのだと思いつつ、もう少し道草をしてみたいと思います。

一　神の「言葉」は「出来事」になる

神ご自身の「言葉」には「出来事」を引き起こす力があります。『創世記』で「光あれ」と神が言われる時、光があります。ヘブライ語の「ダーバール」は言葉でもあり、事柄でもあります。「出来事」とは、そこに何かを引き起こすことと言ってみてはどうでしょうか。聖書の朗読は、たんなる文字の朗読として終わるのではなく、その場に何事かを引き起こす力を持っているのです。聖書自身の中に、そうした場面を見い出すことが出来ます。

ナザレの会堂で

ナザレの会堂でのイエスご自身の聖書朗読の記事があります（ルカ福音書第四章）。イエスは会堂で指名され、当時巻き物だった聖書ーその時はイザ

ヤ書ー を手にとって立ち上がられ、朗読されます。朗読といってもおそらく歌われた筈です。聖書も詩編も、イスラエルにおいては地方や家族によって異なった、多様なメロディで歌われるものでした。読み終えたイエスは「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められます。人々は驚き色々言い始め、ついにイエスを崖から突き落とそうとする事態に発展していきます。何事かが起こり、始まったのです。『ルカ福音書』において、イエスは聖書朗読をもって働きを開始したと言えます。

エマオ途上で　さらに『ルカ福音書』の最後の方にも、印象的な場面が出てきます。復活後の弟子たちへの顕現物語の一つ、エマオ途上の物語（ルカ福音書二四章）です。復活されたイエスは、失意のうちにエルサレムを離れ、トボトボ歩いていた弟子たちに現れ一緒に歩かれます。そして道々「聖書全体にわたり、御自分について書かれていること」を説明されます。もちろん旧約聖書のことです。聖書を通してイエスはご自身のことを説き明かされ、それを聞いた時、弟子たちは心が燃えるようになります。この場面は礼拝での聖書朗読ではありませんが、私たちも聖書朗読を通して、心が燃えるような復活の主との出会いの経験へと招かれているのです。

ヨシヤ王の改革　もう一カ所、『列王記下』第二二章を挙げておきましょう。すっかり先祖伝来の神の教えを忘れ、偶像崇拝など堕落していた王や人々が、神殿の修理工事中に発見された「律法の書」を朗読し、「衣を裂いて」悔い改めるという記事です。「申命記」改革と言われる出来事です。聖書の朗読を聞いて、驚いて、生き方を変える「回心」が起こります。神の言葉の朗読に触れることは、喜びであると同時に、回心・懺悔につながります。私たちは聖餐式の「懺悔」を重んじます。それは大切なことです。しかしあの「懺悔します」という部分だけが懺悔ではなく、朗読を聞くことも、同じような回心の出来事であり得るのです。決して「み言葉」―聖書朗読―は聖餐式の「前座」ではないということは、ここでも言えます。

二　「読み手」もまた「聴き手」である　―主ご自身が語られる―

冒頭に挙げた聖句の中から、礼拝における聖書朗読の起源に、使徒の手紙の朗読があることがわかります。しかもそれは人間の言葉であるけれども、神の言葉として共同体によって受け入れられ、そのようなものとして聞かれるようになってきました。そこから次のことが

朗読の指針として浮かんできます。

まず朗読者自身は神の言葉を伝えているとしても、神ではないということです。当たり前のことですが、聖書の中で神様の言葉を、あるいはイエスご自身の言葉を読む時に、一体朗読者自身は何者なのかということになります。一言で言えば、朗読者は福音を宣べ伝える者であると同時に、それを聴く者です。朗読者が朗読する時、そこには主ご自身が臨在される、そこで真に語られているのは主ご自身であると言えます。一方、朗読者は決して主自身ではないわけです。しかし私たちのこの人格、肉体、声という器を用いて、主ご自身が語られる、ここに礼拝における聖書朗読の困難と喜びがあると言えるでしょう。

しかしこのことは、それほど神秘的に考えなくとも、他人の手紙を公の場で紹介、朗読する時に自然にやっていることでもあります。例えば、ある教会員の方が海外に出張されていて、教会に手紙が来たとします。親しい人がそれを礼拝の後で会衆の前で読みます。大切な仲間からの手紙であった時、会衆は、手紙の朗読者の話を聞いているとは誰も思わず、本当の送り手がそこにいるかのように感じるでしょう。また読んでいる人も、自分は手紙の主ではないと知りつつ、しかし共感をもって読み、紹介するでしょう。先程申し上げたことが自然に、身近な形で行われています。そこからやはり朗読の指針についても同じことが言えま

す。朗読者が真の送り手になりきって感情移入しきって読んでもおかしいし、逆にまったく冷たく機械的に読んでも変です。節度と共感をもった丁寧な朗読が、真の送り手の言葉を伝えるのでしょう。

「朗読者自身が、聴き手でもある」。神の裁きの言葉を、あるいは励ましの言葉を、自分も会衆の一人として聴かされつつ、またそれを仲間である会衆に、的確に伝える大切な使命を、朗読者は持つのです。

三　初めて聞いて分かるように

また本当に手紙であったとすると、朗読を聴く人は誰もコピーを持って聞いてはいない筈です。最初のキリスト者の礼拝においてそうだったでしょう。聖書本文を会衆全体が持って読めるなどというのは、ずっとずっと後の時代のことです。

聖書朗読の際に、会衆もちゃんと聖書を目で追って読むように、という指導を受けられた方もいらっしゃると思います。それはそれで聖書に対する真剣さと言えますし、否定するものではありません。しかし朗読者の基本的な姿勢としては、文字を追っていない聞き手が「初

めて聴いて分かる」ように読むことが大切です。聞き手も出来るなら、文字を追うよりも、人の肉声を通して語りかけてくる神の言葉そのものに、耳と心を傾けてみたらと思います。「聖書のみ言葉を聞きましょう」。

以下、さらに実際的・実践的な事柄について、箇条書きに挙げてみたいと思います。

四　その他さまざまなこと

聖書朗読のために、やはり気持ちの準備と、多少技術的な準備～練習～が必要です。そのためには聖書朗読を依頼する方も余裕をもって依頼すべきですし、朗読者も何回かテキストを繰り返し読んでみることが望ましいのは当然です。内容が何を言っているのか、誰が誰に言っているのか、理解しないまま読んだりすると、読む方も聞く方も落ち着きません。以下には極めて実際的なことを思いつくまま列挙してみます。

a　全体の速さ。会衆の規模や礼拝堂の大きさ、音響・残響によって異なります。一般に

は、かなりゆっくりはっきり読んでいいと思います。ただしそれも文章の流れをつかんでいないと、ただ遅いだけでは自然な抑揚やリズムがなくなり、それもまた聞きにくいものです。

b 個々の言葉（名詞や動詞、その他）の強さのバランス。朗読箇所の主題になっているような言葉、また一般的でない言葉（たとえば「エッファタ」とか「ゴルゴタ」等）は、自然な範囲でより丁寧に読まれるとよいでしょう。

c 声の大きさ、高さ、語尾の明確さ、言葉の鮮明さ、間、そして自然さ。
自分の声や発音のくせを理解しておくとよいと思います。誰でもくせはあるものです。それが完全になくならなければ朗読しないなどと考えては、結局いつまでも出来ません。自分のくせを知った上で、心配りしながら丁寧に読めば十分です。

d 聖書朗読前後のアナウンス（ルブリック）はやはり正確に。

e 一番後方にいる人に、声を届かせるつもりで。ただしそれは声の大きさというよりも、読み手の心構え、心身の姿勢に関係していると思います。

f マイクを使用する場合は、そのマイクのくせや性能をテストしておくこと。

g 礼拝の中での自分の役割の時（いわば「出番」）を理解しておくこと。礼拝に遅れな

h

いことは当然ですが、「聖書のみ言葉を聞きましょう」と言われてから、後方の席から億劫そうに出ていくのでは、礼拝の流れが崩れてしまいます。形式的な美しさだけの問題ではなく、これまでお話してきたような聖書朗読に対する喜びと大切さへの理解があれば、そうはならないと思います。「朝・夕の礼拝」の場合も同様です。この辺りの動きについては、礼拝の司式者と事前に打ち合わされたらいいと思います。最後に朗読の場所、立つ位置について。これも各教会の構造や礼拝の形、会衆の数等によって異なってきますので、画一的なことは言えません。基本的な原則と思うのは、会衆全体から見えやすく、聞こえやすい位置ということです。聖書朗読は聖餐式の前半部分や、「朝・夕の礼拝」においては大事な「焦点」（フォーカス）です。そのことがきちんと示されればと思います。

おわりに

―喜びのある奉仕へ―

いろいろと述べてきました。「そんなに大変なことなら自分はやらない」と、どうぞおっしゃらないで下さい。言葉にすると大袈裟ですが、考えてみれば当たり前のこと、またすでに自然に行われていることを、述べてきました。朗読についてはやはり得意・不得意はあるものです。声の響きやすい方、一方発声の辛い方もある筈です。しかし恵まれた朗読のセンスや美声の持ち主が、常に礼拝での良い聖書朗読者とは限りません。自分の美声や技量に溺れてしまう危険もあります。基本的には技術的なことではなく、誠実に準備して丁寧に読む、そこに尽きるのでしょう。ですからこの「聖書朗読セミナー」のような会もいいのですが、ある人が指導者になって、人の朗読の欠点だけを指摘するようなことは絶対良くないと思います。目立つ欠点の指摘は簡単です。しかしそれ以上に、良い点を見つけあい、生かしあいながら、喜びのある奉仕へと互いに成長していくこと、そこにこそ教会の奉仕と信仰の深みへの招きがあると思います。

それぞれの教会の考え方や事情があります。以上述べてきたことは一つの資料に過ぎませ

ん。教会の皆様の中で、また教役者と共に、よく相談しあいながらこの聖書朗読の奉仕がより豊かなものとされていきますよう、お祈りいたします。

〈付記〉

東京教区礼拝音楽委員会主催によって開催され、一九九三年以降私が担当した「聖書朗読セミナー」での、毎回共通していた話、配布したパンフレットの内容を、まとめてみました。いろいろな方のお話や文献を参考にさせていただいています。その全部をここに挙げることは出来ませんが、一部主なものを参考文献・資料の意味も含めて、紹介させていただきます。

〈参考文献・資料〉

（聖公会では）

森紀旦編　『聖公会の礼拝と祈祷書』、聖公会出版、一九八九年

『改定増補日本聖公会祈祷書解説』、管区事務所、一九九四年

（ローマ・カトリック教会のもので）

土屋吉正著　『暦とキリスト教』、オリエンス宗教研究所、一九八七年

〃　『典礼の刷新』、オリエンス宗教研究所、一九八五年

〃　『ミサがわかる―仕え合う喜び』、オリエンス宗教研究所、一九八九年

カトリック中央協議会『ローマ・ミサ典礼書の総則・典礼暦年に関する一般原則』　一九八〇年

〃　『ミサの聖書朗読指針』、一九八八年

（その他）

D・ボーンヘッファー　『説教と牧会』　『共に生きる生活』（新教出版社）

（朗読そのものについて）

竹内敏晴著　『ことばが劈かれるとき』（思想の科学社）等

また東京教区礼拝音楽委員会主催研修会における、井田泉司祭（聖公会神学院専任教員）の講話（一九九一年）、石井祥裕氏（ローマ・カトリック教会信徒。上智大学講師―典礼学―）の講話（一九九六年十月五日）を、参考にさせていただきました。

（司祭　加藤　博道　　東京教区牛込聖公会聖バルナバ教会牧師・聖公会神学院兼任教員）

シリーズ奉仕職を考える「

聖書朗読の喜び

司祭　加藤　博道

発行　日本聖公会東京教区宣教委員会
〒105　東京都港区芝公園三―六―一八
「　〇三（三四三三）〇九八七
◇　〇三（三四三三）八六七八
制作協力＝東京教区広報委員会

初版　一九九七年三月二〇日
二刷　一九九七年六月三〇日